

芸術学・宗教学・哲学の現場から

思索の道標を もとめて

ドイツ観念論研究会 編

萌書房

第I部 芸術篇

第1章 批判精神からの美学の誕生……………伊藤 政志……………5

——カント美学からの／への問いかけ——

第一節 批判とは何か

第二節 カント美学のクリティカルポイント

第三節 批判する／される権利

第2章 芸術における「触覚的視覚」……………高梨 友宏……………26

——「カント美学」の一解釈を手引きとして——

はじめに

第一節 感覚の往来

第二節 美的近代の変容

第三節 芸術における触覚的視覚の諸相

おわりに

第3章 応答する力へ……………柿木 伸之……………49

——ベンヤミンの言語哲学の射程——

第一節 言語の動態へ

第二節 言語の媒体性をめぐるフンボルトとベンヤミンの思考

第三節 名としての言語

第四節 翻訳としての言語

第4章 芸術作品と環境への意識……………石黒 義昭……………70

はじめに

第一節 環境思想

第二節 ハイデガーと芸術作品への問い

第三節 ハイデガーと物

おわりに

第II部 宗教篇

第1章 ヘーゲル『精神現象学』における宗教哲学……………来栖 哲明……………91

序

第一節 論証的認識方法としてのヘーゲル弁証法

第二節 『精神現象学』『宗教』の章

第三節 「心霊上の事実」としての宗教の問題
——結びに代えて——

第2章 現代における神秘主義の可能性…………… 岡村康夫…………… 109

はじめに

第一節 「無」の自覚へ

第二節 神秘主義の可能性

おわりに

第3章 ハイデガーのシエリング論と否定神学…………… 茂 牧人…………… 128

序

第一節 体系と自由との相克

第二節 実存と根底

第三節 無底 (Ungrund) について

結語

第4章 神の問題…………… 塩路憲一…………… 147

——クザールヌスとショーペンハウアー——

序

第一節 クザールヌスと『精神に関する無学者の対話 (Istoria de mente)』

第二節 ショーペンハウアーと『意志と表象としての世界』

第三節 結論

第Ⅱ部 哲学篇

第1章 ドイツ観念論の輪郭…………… 滝 紀夫…………… 167

第一節 麓まで——帰納法、そして観念論

第二節 五合目まで——フイヒテと知識学

第三節 頂上へ——自我および絶対者の運動

第四節 頂上からの道——多世界観の可能性

第2章 価値と尺度をめぐって…………… 瀧 将之…………… 186

——ハイデガーのニーチェ解釈より——

序

第一節 ニーチェにおけるニヒリズムの概念とハイデガーによるニーチェ解釈

第二節 人間を尺度とする形而上学の系譜——プロタゴラス、デカルト、ニーチェ

結 人間が尺度となる二つの仕方——デカルトⅡニーチェ対プロタゴラスⅡハイデガー

第3章 シェーラーにおける実在性の意義……………米持和幸……………205

序

第一節 シェーラーの主意的実在性学説

第二節 シェーラーにおける根源的な実在性体験の可能性

第三節 シェーラーにおける根源的な実在性体験の意義

第4章 芸術・宗教・哲学と現代……………佐野之人……………224

はじめに

第一節 後期ヘーゲル哲学の根本構造

第二節 後期ヘーゲル哲学に到る道

第三節 後期ヘーゲル哲学の根本問題

第四節 芸術・宗教・哲学と現代

*

あとがき——ドイツ観念論研究会・第三期の活動

思索の道標をもとめて

——芸術学・宗教学・哲学の現場から——